Ⅰ　序　　章

1　調査の経過と概要

この報告書は東紀寺遺跡において実施した、奈良女子大学附属中学校屋内運動場（以下、体育館とする）の建設にともなう発掘調査の報告である。

調査地は平城京外京の東方外、京東条里四条一里中にあり、紀寺推定地から約300ｍの距離にある。また、付近では古墳時代の遺物等の散布も知られており、重要遺構の存在が予想された。そこで、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、奈良女子大学、奈良国立文化財研究所の間で協議した結果、東紀寺遺跡調査会を組織して調査を行うこととなった。

体育館は、敷地内にある旧講堂を撤去して、その跡地に建てることとなっていた。そこで旧講堂の敷地全体を含む、東西約50ｍ、南北約30ｍの調査区を設定し、体育館建築面積全体にほぼ匹敵する約1500㎡を調査した。２月10日、関係者立ち会いのもと調査区の設定を行った。設定にあたっては、体育館敷地東辺に相当する部分を、機材搬入路として使用するために、調査区から除いた。また、調査区内東辺部には汚水管が南北に横断し、調査期間中も継続して機能していたため、管の直下については調査できなかった。

調査区設定後、ただちに重機による掘削を開始し造成土、耕土などの除去に取りかかった。造成土が厚いことや、給水管・汚水管・雨水管が調査区内を縦・横断していたことなどのために、重機掘削にやや手間取ったが、２月18日から作業員の手による掘り下げにかかり、本格的な調査に移った。

調査区内は、旧講堂建設や旧練兵場の造成、あるいはそれ以前の耕作などにより大きく削平を受け、古代あるいは中世の遺物包含層は全くといってよいほど認められなかった。また、旧講堂の基礎地業や建築廃材を投棄した土坑による攪乱、調査区北辺部の汚水管や雨水管の埋設にともなう撹乱が、現地表下1.3ｍ前後、ないしさらに深くにまで達していた。このうち、調査区北辺部を東西に縦断する雨水管は、調査期間中も機能していたため、その部分については調査不可能であったが、埋設された雨水管の上面が遺構検出面より約50㎝下に位置しており、周囲の遺構検出状況から見て、遺構が残存する可能性は極めて低いと判断された。旧講堂基礎地業部分、廃材投棄土坑については、整理・清掃にかなりの時間と労力を費やし遺構検出に努めたが、残念ながら遺構はまったく認められなかった。

このように攪乱と削平が著しいために、遺構の残存する範囲はほぼ調査区中央部に限られ、しかも深く掘りこまれた遺構が比較的よく残っているに過ぎなかった。また、中央部の主たる遺構残存部についても、旧講堂の排湿用の暗渠が縦横に延びており、遺構の残りは良くなかった。しかしながら、予想外にも古墳３基を検出し、奈良時代から平安時代の井戸１基・土坑１基、時期は明確ではないが掘立柱建物２棟なども検出した。また、その他に時期不明の土坑17基・耕作溝27条、旧練兵場の塹壕などを検出した。

実際の調査経過は、tab.1のとおりである。

tab. 1　調査の経過

2月10日	調査開始。現地にて協議。重機掘削開始。
2月16日	重機掘削完了。発掘機材の搬入。分電盤設置。
2月18日	作業員の手による本格的な調査にはいる。
2月19日	調査区東半部で遺構が現れ始める。基準杭、地区杭を設置。
2月23日	旧講堂の基礎地業部に残る栗石、建築廃材を投棄した土坑の整理に手間取る。
2月26日	旧講堂建築に関連する撹乱土の除去が完了する。
3月2日	遺構検出が本格化する。
3月5日	遺構の掘下げを始める。
3月10日	調査区南辺から始めた遺構検出が北辺に到達。
3月11日	古墳の周溝を掘下げる。埋土からの遺物の出土は少ない。
3月16日	調査区の清掃、航空写真撮影・測量の準備にとりかかる。
3月18日	午前中、清掃。午後、無事に空撮・空測を終える。
3月19日	午前、地上写真撮影。午後から断割調査にはいる。井戸の掘下げを開始する。
3月22日	調査区南辺に設けたセクションベルトをはずし始める。
3月25日	井戸枠上半部を検出したところで、写真撮影をする。土坑を完掘する。土馬出土。
3月29日	井戸を完掘する。柱穴の削平が著しいため、建物の規模を明確にできない。
3月30日	土層図の総仕上げ。すべての調査を完了する。

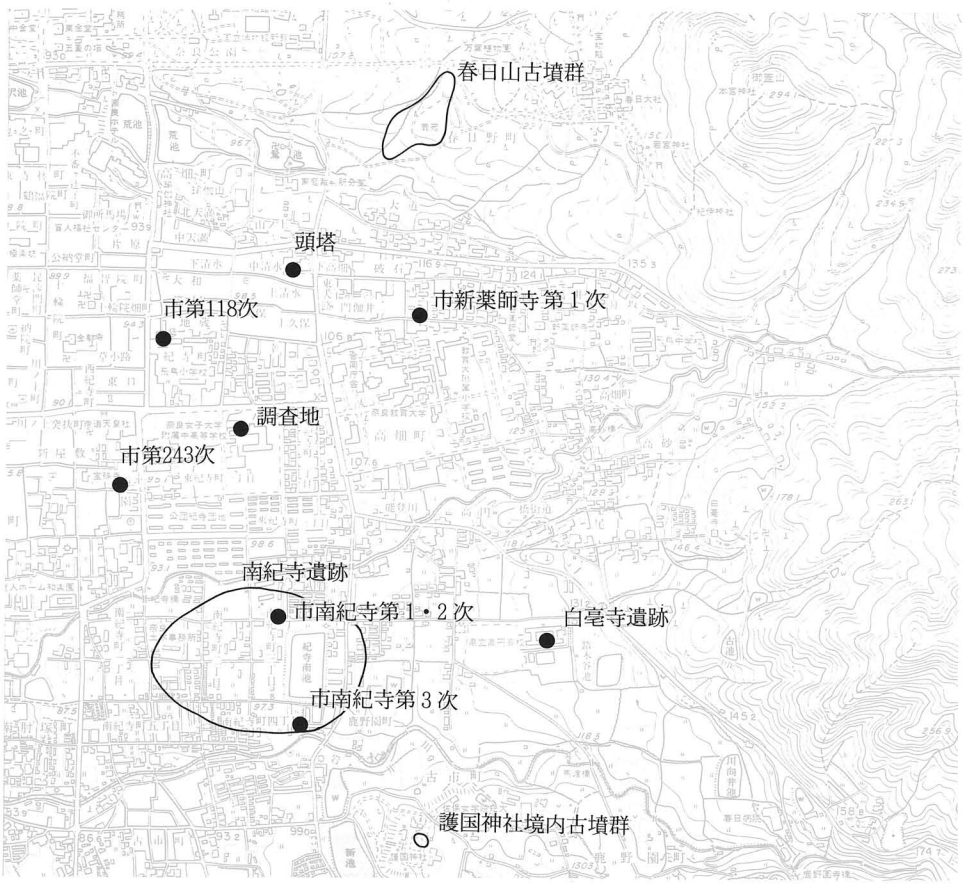

fig. 1　調査位置と周辺の調査（1：20000）

2　周辺の調査

周辺では古墳時代の遺跡がいくつか調査されている。東紀寺遺跡の北東方、春日（御蓋）山西麓に広がる奈良公園内の飛火野地区周辺には、春日山古墳群（春日山古墓）と総称される御料園古墳群・飼料園古墳群が点在する。いずれも横穴式石室を有する小規模な円墳である。このうち飼料園第１～５号墳と御料園第１号墳が、1948～49年に奈良県史跡調査会により調査されている。御料園第２号墳からは須恵器・鉄刀等が出土している。

奈良市教育委員会が奈良市紀寺町686－1番地他で実施した第243次調査では、左京五条七坊十三坪南辺の五条大路想定地を調査しているが、古墳時代中期の方墳１基を検出している。墳丘・埋葬主体部等は失われていたが、幅1.5～2.0ｍ、溝心心間の距離が東西・南北とも約12ｍの周溝が見つかっている。北側周溝底に掘り込まれた土坑状の窪みからは、５世紀後葉の須恵器９点がまとまって出土している。調査地は、東紀寺遺跡が立地しているのと同じ扇状地の、末端部近くに位置しており、両遺跡の関連が注意される。

東紀寺遺跡の南方、南紀寺町一帯は、弥生時代から古墳時代の遺物散布地として知られていたが、奈良市教育委員会の行った３次にわたる調査で、古墳時代から飛鳥時代にかけての濠、集落跡などが発見されている。紀寺南池北西で実施された第１・２次調査では、旧能登川に連係すると考えられる石積みをともなう濠が発見された。その全容は明らかとはならなかったが、37ｍ以上にわたる岸壁の石積みが検出されており、規模の大きさを物語っている。出土土器から５世紀中頃以前に掘削され、６世紀前半頃に廃絶したとされ、豪族の居館、古墳、あるいは園池などではないかと考えられている。一方、紀寺南池の南方で行われた第３次調査では、５世紀後半から７世紀にかけての竪穴住居、掘立柱建物、掘立柱塀、溝、土坑などを検出している。窯跡や古墳の副葬品以外には、あまり出土例のない須恵器器台が出土したことから、須恵器製作工人の集落である可能性が指摘されている。

大安寺町に所在する杉山古墳は、昭和30年に小規模な調査が行われた。現在は、奈良市教育委員会により調査が続けられており、第44・45・47・53次調査などの成果から、墳丘の全長が約150ｍ、後円部径82ｍ、周濠を含めた古墳の全長約200ｍの大型前方後円墳に復元されている。

白毫寺町にある県立高円高等学校一帯は、白毫寺遺跡として知られる。昭和56年から57年にかけて、奈良県立橿原考古学研究所の手により発掘調査が行われた。遺跡は、高円山西麓の能登川と岩井川とに挟まれた扇状地上にあり、古代の春日の地に含まれている。ここでは、６世紀中頃の古墳が発見されている。径10ｍ程度の円墳か方墳と考えられているが、墳丘がほとんど失われており規模は明確ではない。かろうじて残存していた横穴式石室からは、須恵器、土師器、鉄釘、鉄刀、銀環、銅環（以上玄室内）、金環（羨道部）などが出土した。

鹿野園町にある護国神社境内古墳群（高円神社境内古墳）は、神社整地作業がきっかけとなって、1940年に調査された。いずれも横穴式石室をもつ後期古墳である。もと４基の

古墳があり、調査された３基も大半が破壊され、横穴式石室の一部が残っていたに過ぎない。第４号墳の石室内からは、須恵器、鉄地金銅装の馬具類、鉄族などが出土した。

古市方形墳は、護国神社境内古墳群の南方に位置しており、一辺27ｍ、高さ３ｍの規模を持っていたものと考えられている。調査は昭和39年に行われ、円筒埴輪列、２基の粘土槨が確認された。西槨は破壊が著しく遺物の出土はなかったが、東槨からは二神二獣鏡・画文帯神獣鏡など鏡５面、鉄斧・刀子・鎌などの鉄製工具類、鉄剣、玉類、琴柱形石製品などが出土した。出土遺物からは、４世紀後半ないし５世紀代の古墳と考えられている。

古墳時代の遺跡に比べ、奈良時代から平安時代にかけての遺跡の調査例は意外に少ない。東紀寺遺跡は京東条理四条一里に属すると考えられているが、これまで近辺の調査において条里遺構を考古学的に検出した例はない。特に調査地付近においては、明治時代に開設された陸軍歩兵奈良連隊の営舎（現奈良教育大学）、同練兵場（現奈良女子大学附属中学・高等学校）の造成により、条理遺構が著しく損なわれていると考えられている。

周辺の奈良時代から平安時代の遺跡で注目されるのは、上述の白亳寺遺跡で発見された、７世紀から９世紀にかけての遺構である。発見された遺構には掘建柱建物５棟、池２、井戸７基、小溝、土坑、柱穴群、人為的な改変の加えられた谷などがあり、出土遺物には天平５年銘のある木簡１点、軒丸瓦、鬼瓦、土馬、銅銭（和銅開珎、隆平永宝、富寿神宝）、桧扇、下駄、二彩壺などがある。試掘調査の報告では、池、集水施設と考えられている石組井戸、鬼瓦などの遺構・遺物から、ここに春日（高円）離宮のあった可能性が考えられている。しかし、堀池春峰によれば春日離宮は京東条理でいう六条三里にあったとされ、白亳寺遺跡は京東五条五里に相当すること、奈良末～平安時代初期の「薬師院文書」には、京東五条四・五里に大宅氏、石川氏、大春日氏、稲城王、並城王らの家地があったことが伝えられていることなどから、白亳寺遺跡もそうした貴族、王族の邸宅跡と見たほうが妥当であると考えられている。いずれにせよこの周辺では数少ない、重要な奈良時代の邸宅・庭園遺跡である。

奈良市教育委員会の第118次調査は、東紀寺遺跡にほど近い奈良市立飛鳥小学校の校庭内で実施された。ここは、平城京東七坊大路の想定地であり、また鎌倉期には興福寺の大乗院が南市を立てたと考えられている地域でもある。検出された遺構は柱穴、溝、井戸、土坑などであるが、奈良時代に遡るものはなく、12世紀代、14世紀代、18～19世紀代に時期区分される。12世紀代の遺構には土坑、溝、井戸、14世紀代の遺構には土坑、井戸、18～19世紀代の遺構には土坑、井戸がある。この他、時期不明の遺構として、路肩に石を２～３段積みあげた南北道路がある。明治23年の地籍図にはこの道路が見あたらないことから、明治中期には廃絶していたと考えられている。

奈良市教育委員会の実施した新薬師寺旧境内第1次調査では、掘立柱建物、溝、土坑などが出土しているが、掘立柱建物の時期は13世紀以降に降るようであり、奈良時代に遡る遺構は検出されていない。